

ラインホルド・ニーバーの著作の翻訳について

高橋 義文

はじめに

本学総合研究所の「ラインホルド・ニーバー研究センター」では、研究会等の活動に加えて、これまで未訳であったニーバーの主著『人間の本性と運命』の第二巻『人間の運命』の翻訳勉強会を、今年7月に開始した（それについては、鈴木幸研究員の報告をご覧ください）。ここでは、その報告にあわせて、これまでになされた、わが国におけるニーバーの著作の翻訳の状況を概観しておくことにしたい。

ニーバーがその生涯に出版した著書は、単著が18冊、共著が2冊、合計20冊（パンフレットのような冊子を除く）である。また、生前・死後を含め、他者によって編纂された論文集が13冊あり、それらを含めると、ニーバーの著書は合計33冊になる。それに書簡集が1冊出されている。また、他者編纂によるニーバーの著書からの抜粋と論文を含めた選集が3冊ある。

一方、ニーバーは著書の他に、雑誌論文、エッセイ、序文、論説、説教等を大量に書いている。その数は、現在のところもっとも包括的なロバートソンの『ラインホルド・ニーバーの著作目録』¹によると、2800余編に上る。そうした論文等は、その一部が著作や論文集に収録されてはいるが、ごくわずかにすぎない。今後、徐々にまとめられ、論文集として公刊されていくことが望まれる。

I. 翻訳されているニーバーの著作

ニーバーの著作で、これまで翻訳されているものは、以下のとおりである（論文・エッセイ等の翻訳は、雑誌等に掲載されたものは除き、書籍の形態もしくはその一部になっているものに限った）。

○著書・論文集（翻訳出版の年代順）

1. 栗原 基・訳『近代文明とキリスト教』基督教

思想叢書第1巻、イデア書院、1928年。

原著：*Does Civilization Need Religion? A Study in the Social Resources and Limitations of Religion in Modern Life*. New York: Macmillan Co., 1927.

2. 武田清子・訳『光の子と闇の子』新教出版社、1948年。同訳者による改訳、新教新書、新教出版社、1964年。同訳者による再改訳、聖学院大学出版会、1994年。

原著：*The Children of Light and the Children of Darkness: A Vindication of Democracy and a Critique of Its Traditional Defense*. New York: Charles Scribner's Sons, 1944.

3. 上與二郎・訳『基督教倫理』新教出版社、1949年。

原著：*An Interpretation of Christian Ethics*. New York: Harper & Brothers, 1935.

4. 飯野紀元・訳『信仰と歴史』新教出版社、1950年。

原著：*Faith and History: A Comparison of Christian and Modern Views of History*. New York: Charles Scribner's Sons, 1949.

5. 武田清子・訳『キリスト教人間観 第一部 人間の本性』新教出版社、1951年。

原著：*The Nature and Destiny of Man: A Christian Interpretation*. Vol. 1, *Human Nature*. New York: Charles Scribner's Sons, 1941.

6. オーテス・ケーリ・訳『アメリカ史の皮肉』社会思想研究会出版部、1954年。

原著：*The Irony of American History*. New York: Charles Scribner's Sons, 1952.

7. 武田清子・高木 誠・訳『道徳的人間と非道徳的社会』世界大思想全集30、河出書房新社、1960年。

原著：*Moral Man and Immoral Society: A*

- Study in Ethics and Politics*. New York : Charles Scribner's Sons, 1932.
8. 飯野紀元・訳、『共産主義との対決』〔アーネスト・W・レフィーヴァー編〕時事新書、1961年。〔論文集。ただし本訳書では、レフィーヴァーの序文は訳出されているが、かれが編纂者であることは明示されていない。〕
原著： *The World Crisis and American Responsibility : Nine Essays*. Edited with an Introduction by Ernest W. Lefever. New York : Association Press, 1958.
 9. オータス・ケーリ・訳『自我と歴史の対話』未来社、1964年。
原著： *The Self and Dramas of History*. New York : Charles Scribner's Sons, 1955.
 10. 津田淳・坪井一・訳『人間の本性とその社会』金沢文庫／北望社、1969年。
原著： *Man's Nature and His Communities : Essays on the Dynamics and Enigmas of Man's Personal and Social Existence*. New York : Charles Scribner's Sons, 1965.
 11. 古屋安雄・訳『教会と社会の間で—牧会ノート』新教出版社、1971年。
原著： *Leaves from the Notebook of a Tamed Cynic*. Chicago : Willett, Clark & Colby, 1929.
 12. 野中義夫・訳『人間の本性と運命 第一巻 人間の本性』産学社、1973年。
原著： *The Nature and Destiny of Man : A Christian Interpretation*. Vol. 1, *Human Nature*. New York : Charles Scribner's Sons, 1941.
 13. 大木英夫・訳『道徳の人間と非道徳的社会』現代キリスト教思想叢書 8 所収、白水社、1974年。同、白水社イデー選書、1988年。
原著： *Moral Man and Immoral Society : A Study in Ethics and Politics*. New York : Charles Scribner's Sons, 1932.
 14. 梶原寿・訳、『義と憐れみ—祈りと説教』アースラ・M・ニーバー編、新教出版社、1975年。〔説教と祈祷集〕
原著： *Justice and Mercy*. Edited with an Introduction by Ursula M. Niebuhr. New York : Harper & Row, 1974.
 15. 大木英夫・深井智朗・訳『アメリカ史のアイロニー』聖学院大学出版会、2002年。
原著： *The Irony of American History*. New York : Charles Scribner's Sons, 1952.
 16. 高橋義文・西川淑子・訳『ソーシャルワークを支える宗教の視点—その意義と課題』聖学院大学出版会、2010年。
原著： *The Contribution of Religion to Social Work*. New York : Columbia University Press, 1932.
- 論文・エッセイ（翻訳出版の年代順）
1. 有賀鐵太郎・阿部正雄・訳「我々は人間であって神ではない」。（『ニーバーとバルトの論争—信仰と人間の無秩序』有賀鐵太郎・阿部正雄・訳、アテネ文庫170、弘文堂、1951、35-47頁に収録。）
原著： "We are Men and Not God," *Christian Century*, Vol. 65, no. 43 (October 27, 1948), 1138-1140. Reprinted in *Essays in Applied Christianity*, Edited and Introduced by D. B. Robertson (New York : Meridian Books, 1959), 168-174.
 2. 有賀鐵太郎・阿部正雄・訳、「カール・バルトへの回答」。（『ニーバーとバルトの論争—信仰と人間の無秩序』有賀鐵太郎・阿部正雄・訳、アテネ文庫170、弘文堂、1951、62-74頁に収録。）
原著： "An Answer to Karl Barth," *Christian Century*, Vol. 66, no. 8 (February 23, 1949), 234-236. Reprinted in *Essays in Applied Christianity*, Edited and Introduced by D. B. Robertson (New York : Meridian Books,

1959), 175-182.

3. 竹林拙三・訳「神は正義と平和を望みたもう」。(ラインホルド・ニーバー・平和教会継続委員会『キリスト者と戦争』竹林拙三・訳、日本基督教協議会文書事業部、1959年、35-47頁に収録。)

原著: "God Will Both Justice and Peace," with Angus Dun. *Christianity and Crisis*, Vol. 15, no. 10 (June 13, 1955), 75-78.

4. オーテス・ケーリ・訳「わが精神の歩みーニーバー自伝」。(オーテス・ケーリ・訳『自我と歴史の対話』未来社、1964年、277-304頁に、「補章」として収録。)

原著: "Intellectual Autobiography." in *Reinhold Niebuhr: His Religious, Social, and Political Thought*, edited by Charles W. Kegley and Robert W. Bretall (New York: Macmillan Company, 1956), 3-23.

5. 大木英夫・塩谷直也・訳「ユーモアと信仰」。(大木英夫・深井智朗・訳『アメリカ史のアイロニー』聖学院大学出版会、2002年、261-287頁に「付録」として収録。)

原著: "Humour and Faith." in *Discerning the Signs of the Times: Sermons for Today and Tomorrow* (New York: Charles Scribner's Sons), 1946, 111-131.

II. これまでなされたニーバーの翻訳について

以上のように、現在のところ、翻訳されているのは、分量にして、著書の半数ほど、論文集も含めた全著作の3割程度であるが、これらのリストを見ると、ニーバーの主要な著作のかなりのものが訳されてきたことがわかる。またそのペースもかなりのものである。とくに戦争直後から70年代半ばまで、平均して2、3年に1冊ほどの割合で翻訳が出ているからである。

とはいえ、ニーバーが本格的に翻訳され始めた1940年後半から今日まですでに60数年が経ってい

ることを考えると、その翻訳出版数はいかにも少ない、と言わざるを得ない。それは、ニーバーと世代を同じくし、20世紀半ばを中心に活躍し、しばしばニーバーと並び称される20世紀の偉大な神学者たち、すなわち、カール・バルト、エーミル・ブルンナー、ルドルフ・ブルトマン、パウ・ティリッヒらの著書の翻訳状況と比べてみれば一目瞭然である。それらの神学者たちについては、いずれも著作集が出され、それ以外にも相当な量が訳され、それは現在にも引き継がれているからである。また、古いものについては、復刻版も出され続けている。

それに対して、ニーバーの場合、翻訳の絶対数が少ないだけでなく、復刻版も見られない。ほとんどが絶版で、現在、新刊として手に入るのは、1980年代末以降のほんの数冊(上記リストの2、13、15、16の4冊!)にすぎない。現在では、インターネット等を通して絶版の書物もかつてより格段に入手しやすくなっているとはいえ、ニーバーの著書を求めてその作業をいとわないのは研究者以外ではごくわずかであろう。またたとえ入手したとしても、おそらく1960年代以前のものの文体はすでに読みやすいものと言えなくなっていることも事実である。

ニーバーの名は、わが国で、バルトラの名とともにかなり早くより知られていたにもかかわらず、その思想については、今日に至るまで十分に知られてきたとはいえない。その理由は多々あるに違いないが、翻訳の不十分さがその理由の一つであったことは確かであろう。もちろんそれは、単に翻訳の量だけでなく質も問われなければならないかもしれない。ニーバーの翻訳の困難さがしばしば指摘されてきたからである。²

それにもかかわらず、多くの先達がニーバーの翻訳に挑んでこられたその勇気と労苦には敬意を表すべきであり、今後も、こうした先達の業績に学ぶ必要があることは言うまでもない。

上に挙げたリストから見て取れるいくつかの顕著な点について述べておこう。

第一は、ニーバーへの関心がわが国でかなり早い時期に見られたということである。ニーバーの著書で最初に翻訳された『近代文明とキリスト教』（上記リストの1）が、ニーバーの処女作で、それがなんと原著出版の翌年というすばやさで翻訳出版されているのである。この書は、ニーバーが13年にわたるデトロイトでの牧会の間に書いたいくつかの論文をもとにまとめた著作であるが、ニーバーは、この著書を1927年に出版し、その翌年秋、ユニオン神学大学院に赴任した。したがって、この書が出た頃、ニーバーの名は、かれがデトロイト時代に活発に参画したいわゆる社会福音運動の活動家の間で気鋭の牧師としてかなりの程度知られていたとはいえ、まだ限定的であり、ユニオンの教授陣に加わることになり、ようやく全国レベルのキリスト教世界の主要な場に姿を見せ始めたというところであった。一般的な状況からすると、ニーバーの名はわが国にはほとんど知られていなかったのではないと思われる。ところが、訳者の栗原基は、「訳者序」で、原著者を「米国宗教界の進歩派の驍將ラインホルド・ニーブル氏」³と、ごく簡潔に、そしてある程度正確に、まるで自明のことのように紹介しているのである。

栗原は、ニーバーとこの書についての情報をどこから得たのであろうか。推測であるが、その情報を得たのは、有賀鐵太郎（同志社大学神学部教授を経て京都大学文学部教授）からではないかと思われる。本書出版の2年後、1930年に、有賀は、栗原との共訳で、やはりユニオンの教授であり有賀の指導教授であった著名な教会史家アーサー・G・マッグファートの『近代基督教史』を出版しているからである。

有賀は、二度、ユニオンに留学した（二度目の留学で、日本で初めてユニオンから神学博士の学位を取得）が、最初の留学を終えて同志社の教授になったのが1925年である。したがって有賀の最初の留学は、

ニーバーがユニオンに来る前であった。しかし、デトロイトのニーバーについての情報はおそらくすでに有賀の耳に入っていたであろうし、後述するように、のちにニーバーの論文を編集・翻訳することからして、有賀はこの頃からニーバーにある程度関心を寄せていたと推測して大過ないであろう。おそらくは、留学から戻ったこの有賀と、京都の第三高等学校で教鞭を取り、同校の基督教青年会初代主事を務めていたキリスト者栗原基との間に交流が生まれ、有賀からニーバーの新著の情報と刺激を得て、栗原が翻訳をする、ということになったのではないかと思われるのである。

栗原基（1878-1967）は、東京帝国大学英文科を出て、同志社女子専門学校、広島高等師範を経て第三高等学校教授・教頭を務めた英語学者である。ニーバーのこの書を訳す前にすでに、『英国文学史』（共著、1907）と『英語発達史』（1910）を上梓しており、とくに後者は、まとまったものとしてはわが国最初の英語学史と言われている。しかし、熱心なキリスト者として神学にも関心を抱き、その後キリスト教関係の文献をかなり翻訳するようになった。ニーバーやマッグファートのほかに、やはりユニオンの教授でリバーサイド教会牧師ハリー・エマソン・フォズディックのイエスに関する書を二冊訳してもいる。これもまた有賀の刺激によるものかもしれない。⁴

いずれにしても、栗原の翻訳は、わが国におけるニーバー翻訳史のみならずニーバーへの関心の歴史において、顕著な出来事であったと言ってよいであろう。しかし残念なことに、栗原のこの関心がその他の人々に、またその後に引き継がれることはなかった。ニーバーが再び取り上げられるようになるのは、それから20年を経た、戦後のことだからである。

第二は、戦後まもなくからしばらくの期間すなわち1940年代から60年代初めにかけて、ニーバーの紹介と翻訳がかなり集中的になされていることである。それは、とくに国際基督教大学の飯野紀

元、武田清子の両教授の貢献である。両教授は、それぞれいくつかのニーバーの著書や論文集を翻訳するとともに、ニーバー紹介の書も精力的に著している。⁵

この両氏の翻訳で重要なのは、ニーバーの主要著書である、『光の子と闇の子』、『信仰と歴史』、『人間の本性と運命〔武田訳では「定め」〕』第一部「人間の本性」、『道徳の人間と非道徳の社会』（リストの2,4,5,7）が訳されたことである。なかでも、『人間の本性と運命』は重要である。これは、ニーバーが1939年に5人目のアメリカ人としてエジンバラ大学で担当したギフォード講演の内容であり、成熟したニーバーの思想が展開されているニーバーの主著であるからである。しかし、その第二巻「人間の運命」が訳されずに終わってしまったのは残念なことであった。第二巻は、第一巻以上にニーバーの思想が独特の深みをもって展開されている、ニーバー理解にもっとも必須の著書だからである。

ところで、武田訳から20年余り後に、この主著の訳出を試みたもう一人の人がいた。野中義夫教授である（上記リストの12）。明治38年生まれ、東京帝国大学（倫理学専攻）を出て、群馬大学と足利工業大学で哲学を講じた。⁶野中は、ニーバーのこの書の重要性を認識し翻訳を始めたが、武田訳の存在は知っていたもののそれを見る機会をついに逸してしまったという。⁷また、キリスト教については「素人」である⁸と断っているが、そのせいであろうか、神学用語の類では適訳といえない部分も散見される。しかし、全体としてこなれた分かりやすい訳であり、独自の工夫もなされている。たとえば、人間自己のspiritの次元についてのニーバーの特徴ある議論の部分では、しばしばその翻訳に困惑させられるspiritを「霊」と訳すなど、ニーバーの議論の内容を踏まえた工夫がなされている。また、現代日本の思想状況や哲学の不毛を指摘しながら、ニーバーの重要性とそれに学ぶ必要の意義について述べている巻末の「訳者のこと

ば」は、説得力をもつ内容である。⁹ところがこれも残念なことに、「第一巻」と明白に銘打ちながら、「第二巻」は訳されじまいに終わってしまった。¹⁰

こうしてニーバーの主著が今日に至るまでついに完訳出版されることはなかった。そしてそれが、わが国におけるニーバー理解の一つの大きな障碍となってきたことは確かであろう。

第三は、50年代と60年代、飯野、武田両教授と重なる時期、ニーバーの翻訳にユニークな形で力を尽くしたもう一人の人がいたことである。オーテス・ケーリ教授である（上記リストの6と9）。ケーリは、宣教師の子として小樽に生まれ、同志社大学で歴史学を講じ、戦後日米の交流に貢献したアメリカ人であるが、同大学出身の若い研究者数人と共同で、これもニーバーの重要な著書を訳した。とくに『自我と歴史の対話』（原題は『自己と歴史のドラマ』）は、ニーバーの神学的人間学の頂点とも言える著書であるが、原著出版前にニーバー自身から翻訳を勧められ、送られてきた校正刷りで翻訳を始めたという。¹¹ケーリは、1957年春、共同研究者2名と共にニーバーのもとを訪れインタビューを試みたが、その内容が「訳者あとがき」に記されていて、興味深い。

ニーバーの翻訳作業におけるケーリの顕著な業績は、1956年にニーバーが書いた「知的自伝」（訳では「わが精神の歩みーニーバー自伝」）を訳出、『自我と歴史の対話』に「補章」として収録したことである（上記リスト論文・エッセイ等の4）。このニーバーの自伝的な文章はきわめて貴重で、ニーバーの思想研究に今も欠かすことのできない重要な資料である。

第四は、単なる翻訳を超える重要な作業があったことである。前述の有賀鐵太郎による編訳『ニーバーとバルトの論争』である（リストの論文・エッセイの1,2）。上のリストでは、ニーバーの論文の翻訳の部分のみを挙げたが、有賀の作業の意義は、単にニーバーの論文を訳出しただけでな

く、バルトとの論争の全体を編集・訳出した、ということである。このような形で両者の論争を一書にまとめているのは、アメリカにもない。有賀の独自の作業であった。

ニーバーとバルトの間になされた論争は、1948年にアムステルダムで開かれた世界教会協議会創立総会におけるバルトの基調講演に端を発したものであり、その直後、『クリスチャン・センチュリー』誌にニーバーがその講演批判を書き、それにバルトが応じたものである。双方2回ずつで誌上の論争は終わったが、その議論は今日にも引き継がれており、また引き継がれるべき重要な課題である。¹²栗原に関連して触れたように、有賀はおそらく早くよりニーバーに関心を持っていたが、それとともにわが国にバルトの影響が大きくなる中で、この論争を紹介することが重要と考えたのであろう。いずれにしても、この論争の出版は、わが国における神学史的意義を持ちうる出来事であった。現在、この論争の新しい訳の出版が予定されているとのことであるが、課題を新たに深める機会となることを期待したい。¹³

第五は、大木英夫教授が、過去に訳されている二つのニーバーの書を、ニーバーの思想へのより深い理解を踏まえて、70年代以降、新たに訳し出版しておられることである。『道徳的社会と非道徳的社会』と『アメリカ史のアイロニー』である（上記リストの13、15）。前者は、ニーバーの出世作となった現実主義的社会倫理批判の書であり、後者はニーバー最盛期の成熟したアメリカ論である。とくに後者は、オバマ大統領が影響を受けた書であり、最近のニーバー・ルネサンスの鍵となっているテキストである。

また同じ70年代の初めに古屋安雄教授によってなされたニーバーの牧会日記の翻訳（リストの11）も貴重である。若きニーバーの瑞々しい心の動きとともに後のニーバーの神学思想の基礎となる視点が豊かに垣間見られるものだからである。

Ⅲ. 今後の課題

以上、これまでなされてきたニーバーの著作の翻訳を振り返り、いくつかの点についていくばくかのことを述べてきたが、今後の課題が大きなものであることは明らかである。

何よりも、全体として、翻訳が量的にきわめて不十分であるということである。ある程度のニーバーの著書が訳されはしたが、60年代以前のは訳しなおすことが必要であり、同時に、その他のまだ手が付けられていない著書・論文集の翻訳が、ニーバーの思想研究を踏まえて精力的になされなければならないであろう。以下にその課題案を呈しておこう。

まずなすべきは、ニーバーの主著『人間の本性と運命』の完訳ではないかと思う。以前から多くの人々がその必要を覚えてきたと思われるが、なかなかそれに挑戦することができなかった。しかし、すでに述べたように、大木教授に監修とご指導をお願いして、ニーバー研究センターで取り組みを始めたところである。これまで未訳であった第二巻の『人間の運命』から翻訳を進めているが、それが完成次第、第一巻『人間の本性』を、武田訳と野中訳に学びながら訳し、ニーバーの主著全二巻を完成させたいと考えている。

次に、これまで出たものの中で、とくに『キリスト教倫理の解釈』と『信仰と歴史』と『自己と歴史のドラマ』が早く訳しなおされるべきであろう。『キリスト教倫理の解釈』は比較的小冊であり、『自己と歴史のドラマ』はかなり大部である。新しい訳が早く出ることを願いたい。『信仰と歴史』については、本稿の筆者が現在、飯野訳を参照しつつ新たな訳に取りかかっているところである。

さらに、これまで訳されてこなかったもので、とくに必要と思われるのは、次の三点であろうか。ニーバー自身が出版した論文集、『キリスト教現実主義と政治的諸問題』（*Christian Realism and*

Political Problems. New York: Charles Scribner's Sons, 1953) と『敬虔で世俗的なアメリカ』

(*Pious and Secular America*. New York: Charles Scribner's Sons, 1958) である。もう一点は他者編纂の論文集『愛と正義』 (*Love and Justice: Selections from the Shorter Writings of Reinhold Niebuhr*. Edited with an Introduction by D. B. Robertson. Philadelphia: Westminster Press, 1957) である。前者二書には比較的長文の論文が収録されている。三番目の書も含めてそのいずれにも、ニーバーの視点の特徴が出ているよく知られている論文が目白押しである。

また、ニーバーの以下のエッセイ集も魅力的である。本来説教であったが文章にしたものをニーバーは「説教のエッセイ」と称し、自ら2冊を編んでいる。『悲劇を越えて』 (*Beyond Tragedy: Essays on the Christian Interpretation of History*. New York: Charles Scribner's Sons, 1937) と『時の徴を見分けて』 (*Discerning the Signs of the Times: Sermons for Today and Tomorrow*. New York: Charles Scribner's Sons, 1946) である。とくに前者は、永遠と歴史のパラドクスをきわめて魅力的に論じているエッセイである。後者は、前者に比してより説教の形態が残っているように見えるエッセイであり、ニーバーがどのような説教をしていたのかが感じられるものとなっている。

加えて、晩年のニーバーの政治的大著『帝国と国家の構造』 (*The Structure of Nations and Empires: A Study of Recurring Patterns and Problems of the Political Order in Relation to the Unique Problems of the Nuclear Age*. New York: Charles Scribner's Sons, 1959) も訳されることを期待したい。これは、ニーバーがユニオンを引退後、プリンストン高等研究所で、ジョージ・ケナン(元ソ連大使)やハンス・モーゲンソー(政治学者)との議論をとおり、またかれらの助言も得て著した、国際関係に関する組織的で厳密な研究である。冷戦のさなかにあつて、ソ連内部における

確かな変化を予期しながら、将来の道筋を示した著書であり、アーノルド・トインビーやサミュエル・ハンチントンなどから高い評価を得たものである。

もう一つ、重要なのは上述したニーバーの知的自伝である。これは、せっかくケリー訳があるので、それを参考にしてぜひ新たに訳出しておきたい文献である。ケリー訳で30頁ほどの分量だが、ニーバーの他の著書に付録として付けるか、ニーバーの代表的な論文と一緒に小冊で出版しておいてもよいのではないかとも思う。ニーバーの思想理解に間違いなく助けになるものである。

以上、翻訳の必要度の順で提案を記したが、必ずしも翻訳の順序にこだわるものではない。訳せるものからとにかく早く訳すことが必要である。ただし、ニーバーの思想の根幹をよく理解し、それを踏まえた上でのことであることは、言うまでもない。

おわりに

わが国でニーバーが理解されるためには、ニーバーの著作の翻訳がもっと多くなされなければならない。しかし、ニーバーの翻訳は難しい。というより、ニーバーの思想の論述の仕方、議論の重ね方、そのレトリックを理解し解きほぐすことが難しい、と言うべきであろう。もちろん、それは思想の深みと密接に連動することである。しかし、地道な研究と努力を積み重ねるなら、その先には、ニーバーを少しでも分かりやすい日本語で表す可能性が生まれてくるに違いない。

将来、ニーバーの翻訳がある程度出揃ってきたら、「ニーバー著作集」としてまとめて出版され、次世代にまで読み継がれるものができることを期待したいと思う。

1 D. B. Robertson, *Reinhold Niebuhr's Works: A Bibliography* (Lanham, New York, London: University of Press of America, 1983). この『目録』は1979年に初版が

出されたが、1983年、ニーバー伝を書いたリチャード・フォックス（Richard W. Fox, *Reinhold Niebuhr: A Biography*, New York: Pantheon Books, 1985; second edition, Ithaca, NY: Cornell University Press, 1996）の提供によって大幅に収録数を増やした。しかし、なお完全なものではなく、今後もニーバーの書いたものが発見され、目録に加えられることになると思われる。『目録』の再改定も必要である。

2 この点について、大木英夫教授はこう述べておられる。「ラインホルド・ニーバーが日本にあまり知られなかったのは、翻訳における困難、その困難の故の失敗によるところが大きかったと言わざるをえない。これまでラインホルド・ニーバーに関心をもったのは、大体において英語にかなり堪能な人々であり、そういう人々の中から翻訳にチャレンジする人々が出た。それにもかかわらず、期待されたほどの実りを得なかったのは、単に英語の問題だけでなく、その表現における神学的レトリックが翻訳を困難にしたからであろう」（ラインホルド・ニーバー、大木英夫、深井智明訳『アメリカ史のアイロニー』（聖学院大学出版会、2002年）、「訳者あとがき」、302頁）。

3 栗原 基・訳『近代文明とキリスト教』1頁。

4 H・E・フォスデック『イエスの人格』（1953年）、フォスデック『ナザレ人イエス』（1954年）。栗原は、仙台の第二高等学校在学中、北部バプテストの宣教師アーニー・S・ブゼル（尚綱女学校初代校長）によってキリスト教に導かれた。栗原の紹介で、やはり第二高等学校の学生であった、吉野作造、内ヶ崎作三郎、小山東助といったのちの大正デモクラシーの担い手たちがブゼルの聖書塾に参加し、キリスト教に触れることになった。栗原とかれらの交わりは東京帝国大学でも続いたという。栗原は、のちに、ブゼルの浩瀚な伝記『ブゼル先生傳』（1940年。復刻版『ブゼル先生伝—アンネー・サイレーナ・ブゼル』1992年、大空社）を著しているが、それは、栗原のブゼル宣教師への尊敬の念とともにかれ自身の熱心なキリスト教信仰が息づいている書である。

ところで、栗原は、ニーバーの書の出版の少し前からおそらく翻訳作業に重なる時期、重要な経験をしている。1925年に始まった、日本内地における治安維持法の最初の適用として知られる、京都帝国大学などの左翼学生に対する取り締まりに発する事件いわゆる京都学連事件の

際、検挙された学生たちのために奔走し、その後学生社会科学研究会再建にひそかに力を尽くしたというのである。この経験がニーバーを翻訳する動機の一つとなった、と見ることも可能かもしれない。「訳者序」の次の言葉には、当時の危機的状況にあって、ニーバーの分析と洞察から学ぼうとしている姿勢が窺われるからである。「今や、日本における基督教の歴史は未だ必ずしも長からざるに、踵を接して現れてくる幾多の社会問題に逢着して、早くも去就に迷わんとする様子も見える。反動勢力の前にもろくも妥協の姿すら現し、社会更新の新思想を無批判に危険視して、これと戦わんと呼号する者もある。けれどもこれまでの日本の基督教徒は単に個人主義の道徳を唱導した清教徒の流れを汲み、未だ現実の社会生活について多く知る所なく、また興味もなかった。急激な時代の推移は有識者すら見逃すことのある罅隙〔裂け目〕を生じている。…今までのように、単に自己の有する小なる相対的価値を絶対的価値に誤算して、自ら高しとすることは、自らの壊滅を急ぐのみである。宗教の新しき使命は時代の休徴〔吉兆〕を察し、人心の帰趨を誤らざらしめることにある。この時に当たりて近代の文明批評と宗教批判とを目的とした本書の如き、確かに憂世の士の一瞥に値することと思う」（『近代文明と基督教』〈「訳者序」〉3-4頁〔一部、現代の字体・仮名遣いに変更〕）。

5 飯野紀元『ニーバーの社会主義』（理想社、1952年）、同『ある人生—ニーバーの性格と使命』（塙書房、1952）、武田清子『人間・社会・歴史—ニーバーの人と思想』（創文社、1953年）飯野紀元『ニーバー』人と思想シリーズ（新教出版社、1962年）。同時期、ニーバーの翻訳は手がけなかったが、文明学者山本新氏もニーバーに注目して以下の書を著している。山本新『ニーバーのマルクス主義批判』（黎明書房、1949年）および『暴力・平和・革命—ニーバーの社会変革論』（弘文堂、1951年）である。これら、飯野、武田、山本の三氏は、わが国におけるニーバー紹介者の第一世代といつてよいであろう。ところで、飯野氏によるニーバーの論文集の訳書『共産主義との対決』（原題は、『世界の危機とアメリカの責任』）についてであるが、ニーバーがしばしば誤って極端な反共主義者との批判を受けていた状況に照らすと、この訳書の書名は、そうした誤解がわが国に伝わりかねず、残念である。また、この訳書には、飯野

氏による「ニーバーの人柄と思想」という解説が付いているが、それはこの書の半分の120頁ほどにも上るかなりの分量のものである。

6 本稿の筆者は、近年までこの野中訳の存在を知らなかった。その情報は、安酸敏真北海学園大学教授から教えられた。記して感謝を表したい。ちなみに、この書が何部ほど印刷されたか分からないが、出版元やインターネットを通して古書店等に当たってみたが本書を在庫しているところは見つからず、入手困難な状況にある。

7 ラインホルド・ニーバー『人間の本性と運命 第一巻 人間の本性』野中義夫訳（産学社、1973年）（「訳者のことば」）、2-3頁。

8 同上、2頁。

9 同上、335-347頁。そこにはたとえば次のような文章がある。ニーバーの書は「何よりもキリスト教神学の書である。しかしまたそれは同様の重さで『現代文化批判の書』と言えるのである。『神学』と『現代批判』との結びつき、というよりも両者の同一性ということに、私は深大な意義を感得せずにいられない」。（同上、337頁。）

10 実は、第二巻が出版されなかった事実は最終的に確認できていない。出版元にも確認したが会社の経営者が何度か変わっていて、この書についての情報は全くない、とのことであった。しかし、国会図書館や主要な大学図書館等に見当たらないことから、第二巻はおそらく出版されなかったものと思われる。（別な情報があればお寄せ下さるようお願いしたい。）

11 ラインホルド・ニーバー『自我と歴史の対話』オーテス・ケーリ訳（未来社、1964年）（「訳者あとがき」）、308-309頁。最初の訳『アメリカ史の皮肉』の訳者あとがきには、翻訳者グループに神学の専門がいなかったがそれには「強み」があったとあり（237頁）、それは『自我と歴史の対話』の場合も同様に考えていたものと思われるが、少々理解に苦しむ考え方である。これらの書には、神学的な用語や表現が適切に訳されていないところが処々に見受けられるからである。

12 この論争について、大木教授は「終末論と歴史」の問題として取り上げておられる。大木英夫『バルト』人類の知的遺産72（講談社、1984年）、331-337頁。

13 田上雅徳・深井智朗・編訳『政治と神学—カール・バルトとラインホルド・ニーバーの論争をめぐって』（新

教出版社、近刊予定）。その一部の、「私たちは人間であって神ではない」の訳が、『福音と世界』（2011年、7月、44-52頁）に発表されている。

（たかはし・よしふみ 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科長、教授）